

(様式3号)

学 位 論 文 の 要 旨

氏名 森田 明子

〔題名〕

日本における女性尿失禁患者に対する指導の実態ならびに膣圧と尿失禁との関連の研究

〔要旨〕

本研究の目的は、日本における女性尿失禁患者に対する指導の実態と膣圧と尿失禁の関連を明らかにすることである。

女性尿失禁患者に対する指導の実態を明らかにするため質問紙調査を行った。調査対象は泌尿器科を標榜する病院および診療所1644施設とし、中心となって女性尿失禁患者の治療に携わる医療者各施設1名を調査対象とした。328施設を分析した結果、医師の指導時間は10分未満が80.8%と最も多く、指導内容は骨盤底筋訓練が最も多かった。医師以外の指導者は看護師が193施設と最も多く、指導時間は10分未満が60.5%と最も多かった。指導内容は骨盤底筋訓練が最も多かった。骨盤底筋訓練の指導や評価にバイオフィードバックを用いる施設は非常に少なく、指導後に評価を行っている施設は53.6%であった。

さらに尿失禁女性の実態ならびに膣圧と尿失禁の関連を検討することを目的として質問紙調査と膣圧測定を行った。分析対象数は88名であった。その結果、尿失禁群14.8%、尿失禁経験群37.5%であった。治療経験がない者の尿失禁開始時期は7年以上前が半数を占めており、尿失禁を長期間放置している女性が多いことが明らかになった。

膣圧については、最大収縮圧、平均収縮圧、収縮持続時間のいずれも尿失禁なし群が最大であり、次いで尿失禁経験群、尿失禁群の順であったが、3群間に有意な差は認められず、各群における膣圧のばらつきも大きかった。このことから、女性の尿禁制には強い膣圧が必要なのではなく、腹圧上昇や尿意切迫感が起こる直前に意識的に骨盤底筋群を収縮させることが重要であると考えられる。

本研究によって、尿失禁女性に対する骨盤底筋訓練指導の課題ならびに尿失禁と膣圧の関連を明らかにすることができた。これらの知見は、女性尿失禁の骨盤底筋訓練による治療成果の向上を図るうえで活用が可能である。

学位論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1419 号	氏 名	森田 明子
論文審査担当者	主査教授	村上 京子	
	副査教授	清水 明彦	
	副査教授	田中 満由美	
学位論文題目 (題目名が英文の場合は、行を変えて和訳を括弧書きで記載する。)			
日本における女性尿失禁患者に対する指導の実態ならびに膣圧と尿失禁との関連の研究			
学位論文の関連論文題目 (題目名が英文の場合は、行を変えて和訳を括弧書きで記載する。)			
日本人女性の尿失禁の実態ならびに膣圧と尿失禁との関連の検討			
掲載雑誌名 山口医学 第 64 巻 第 2 号 P. ~ (2015 年 5 月 掲載 (掲載予定))			
(論文審査の要旨)			
<p>本論文は、尿失禁がある女性に対し、保存的療法の第1選択となる骨盤底筋訓練を推進するため、保健指導の実態を調査し、骨盤底筋の収縮力としての膣圧と尿失禁の関連を明らかにすることを目的とした研究である。女性の尿失禁罹患率は10～20%程度であり、今後の高齢化社会で女性のQOLを高めるための研究として意義があると思われる。これまで、骨盤底筋訓練の有効性に関するいくつかの研究はあるものの尿失禁と膣圧との関連に着目した研究は少なく、バイオフィードバックを取り入れ指導効果を明らかにしようとする試みには独創性が認められる。</p> <p>本論文は二つの研究より構成されている。全国の泌尿器科を標榜する病院・診療所に対する実態調査を行い、328施設を分析対象とした。1か月あたりの平均女性尿失禁患者数が30名以上の施設は33%に及び、93%の施設は骨盤底筋訓練を指導しているが、指導後の評価を行っている施設は54%に留まっている現状が明らかとなった。さらに、21～72歳までの女性88名を対象とし、3回の膣圧測定により尿失禁との関連を検討したところ、最大収縮圧は尿失禁群(13名) $34.5 \pm 20.4 \text{ mmHg}$、尿失禁経験群(33名) $35.6 \pm 19.1 \text{ mmHg}$、尿失禁なし群(42名) $39.5 \pm 18.7 \text{ mmHg}$ と有意な差は認められず、ばらつきが大きかった。これらの分析を通し、バイオフィードバックを用いた骨盤底筋訓練の必要性和保健指導の課題が明示されたことが成果である。</p> <p>審査においては、本研究科の倫理審査基準に基づき適切に対応されていること、論旨が明確であることを確認している。最終試験では、審査委員から実験群、対照群の背景についてなどの質問がなされ、それに対して適切に回答され、今後は若年女性の尿失禁についても検討していきたいと課題が語られた。</p> <p>以上のことより、本学位審査委員会は、本論文が審査基準を満たしており、論文提出者である森田氏が看護専門領域における研究者としての能力を有するものであると確認し、博士論文と認め合格とする。</p>			
備考 審査の要旨は800字以内とすること。			